

Title	織田作之助『土曜夫人』論 : 「読売新聞」を手がか りに
Author(s)	斎藤, 理生
Citation	語文. 2017, 106-107, p. 156-169
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70991
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

織田作之助『土曜夫人』論

――「読売新聞」を手がかりに-

斎 藤 理 生

紙と中央紙との差異を考える手がかりも得られるにちがいない。 要である。また、敗戦直後における他の作家の新聞小説や、 など、〈世相〉を色濃く反映した代表作について考える上でも重 哉』(「海風」一九四〇・四 する。その上で、 に、短い時間の中に多種多様な人物が交錯する小説の構造を分析 六・八・三〇~一二・六)を、 このような分析は、 手続きとして、まず織田と新聞小説との関わりを確認する。 本論では、 織田作之助の絶筆 小説と初出紙面の呼応とずれを検証する。 織田の他の新聞小説はもちろん、『夫婦善 Þ 新聞小説として読み直す。 『土曜夫人』(「読売新聞」一 世 相 (「人間」一九四六・四) 地方 九四 次

新興地方紙から大新聞

と、二足のわらじを履いていた。夕刊大阪新聞社で社会部の記者説家として本格的な活動を始める。織田は当時、作家と新聞記者一九四〇年、織田作之助は『夫婦善哉』で「文藝」賞を得、小

説を同紙に連載したこともあった。として勤める傍ら、野田丈六という筆名で『合駒富士』という小

(『十五夜物語』一九四五・九・五~一九)。 (『十五夜物語』一九四五・九・五~一九)。

『光の都』という小説が連載予定で、六月一七日には予告が出てではなくなってくる。四五年七月からは、「香川日日新聞」にがってきている。新聞社にとって使い勝手の良い駒のような存在ただ、一九四五年ごろになると、織田の作家としての評価も上

作家として期待され始めていたことがわかる。 活躍を続けつ、ある」作家として紹介されている。 かも簡潔にして含みのある作風をもつて、 た。 に連載されなかった、 11 の二面 織田の顔写真と「作者の言葉」が載っており、「流麗秀美し 七月四 しかなかった窮屈な紙面の中央に、三段抜きで掲載され 日 の高松市 幻の作品である。予告は、当時すでに表と への大規模空襲で新聞社 不振の創作界に縦横の が被災したため 織田が 一人の

時期に、地方の新興紙からも次々と連載小説の依頼がくる。 月には「人間」に『世相』を発表し、いずれも話題を呼ぶ。 三月には「改造」に『競馬』を、「新生」に『六白金星』を、 そして一九四六年になると、織田の創作活動は華やかになる。 その 四

ては、 が書ける作家が欲しい。 テンツを求め、 地方紙が作られ、すぐに競争が激化した。各社は目玉となるコン に提供した。〈言論の自由〉がもたらされた勢いもあり、多くの 聞の発行部数を抑制し、 背景にはGHQの方針があった。GHQは民主化のため、 読者がその地に縁の深い人々に限られるので、 新聞小説にも強い関心が寄せられた。 地元出身者ならなお良い 地方で新たに作られる新聞に紙を優先的 地方紙とし 地元の小説 大新

とに成功した。 四~八・九)という、 六〜七・二五)と『夜光虫』 応え、『それでも私は行く』(「京都日日新聞」一九四六・ そこで京都と大阪で、 共にその土地では人気の出た作品を書くこ 織田作之助が起用された。 (「大阪日日新聞」 一九四六・ 織田、 も期待に 五二 四:二

> 聞 連載した地方新聞と何がちがったのだろうか。 台であった」と述べている。では「読売」は、 がったことは間違いなかろう。吉行淳之介は 小説欄は、 このように実績を積んだことが、 今では考えられないくらい、 「読売新聞」 小説家にとっての檜舞 「当時の大新聞 織田がそれまでに での連 し載に の新 つ な

聞 京新聞」五三万八〇五〇部、 論調査」によれば、「朝日新聞」三五三万三二五九部、「毎 の国内新聞発行部数は、 大阪新聞」三一万二〇五九部、 三四三万七三三六部、「読売新聞」一七四万二四九二部、「 GHQ/SCAP資料 「産業経済新聞」一三万一五八一部 「京都日日新聞」七万五〇〇〇部 新聞に関する世)日新 東

まず発行部数である。

やや時代は下るが、一

九四八年五

月

待点

当時は「朝日」「毎日」との差は大きかった。 「読売新聞」の本格的な全国 (大阪) 進出は一九五二年であり、 二大紙に負けない知名度 ただ「読売」には

一大阪日日新聞」一一万七一○○部であったという。

から、 げる絶好の機会が訪れていたのである。 シェアを持っていた新聞から依頼が来た。 時発行が許されていなかった時代に、 を誇っていた。GHQの指導で、まだ一社による朝刊と夕刊の 尾崎紅葉以来の新聞小説の伝統があり、 東京の/ 伝統ある /朝刊紙 織田にとってさらに名を挙 中央の朝刊紙として大きな 京阪の/新興/夕刊紙

依頼を受けていた。 実は、 には、 織田はこの 東京の新興紙 前にも、 しかしいずれも頓挫していた。 複数の東京の新聞社から連載小説 「みやこ新聞」 に並載する話があ 『それでも私 0

は

こうした形式は不自 たらなかったというのである めだという。 0) 図書館織田文庫所蔵)によれば、「いやしくも東京を地盤 でなく「九州 が同業界における肩身の狭い」という意見が社内に強かったた 応の中央紙が京都日日の焼なほし小説を載せるなんて云はれる 郎から織田 の話は、 同時期に連 先方の都合でなくなった。夕刊みやこ新聞社の斎藤英 新聞業界の都合を優先させたことで、 への一九四六年四月一四日付書簡 タイムズ」と し載していた 1然ではない。 「四国新聞」にも連載していたため、 『夜光虫』 ところが「みやこ新聞」 は、 「大阪日日新聞」だけ (大阪府立中之島 並載決定にい とする の連

に書かれ 明されていることだ。 とを交錯させながら、 のは一九四六年一月二七日から七月一〇日だから、 という言葉があり、 うだが、文中に「里見さんのあとでしたら、いつ頃からですか. 文化部長 ゐますから、そのうち筋書き送ります」と書いている『東京新聞 田作之助と大阪』には、 0))世相) Ő, 構成は、 話が急に立ち消えになったことがわかる。 のいろんな階級の女性を書きたいと思つてゐます」 別の書簡では、 た手紙だと推測される。 宮川宛書簡』 ジイドの「贋金づくり」の調子で、作者と登場人物 里見弴 この内容は 女の都としての京都と大阪 織田が 「東京新聞」 が掲載されている。手紙に日付はないよ 『十年』が「東京新聞」 「連載の件、その後構想をねつて 注目されるのは、 『土曜夫人』を想わせる。 で連載 の候補に挙が 増田周子編 (もちろん現下 に連載された 同年の春ごろ その 「構想」 ったも

説を書いたのは、他に良い案がなかったゆえかもしれないが、目売新聞」で、以前「東京新聞」のために考えていた企画に似た小きながら、社長が邦枝完二を主張したらしい。これもおかしい。生曜夫人を書いたのは、東京新聞の社長に邦枝完二とどっちがお土曜夫人を書いたのは、東京新聞の社長に邦枝完二とどっちがおところが「昭和二十一年九月二十二日 青山光二宛書簡」では、ところが「昭和二十一年九月二十二日 青山光二宛書簡」では、

に物を見せたいという気持ちもあったと推測され

造の いる。 二十一年九月二十二日」付の書簡には、「土曜夫人で今まで くの作風の総決算をしよう」という意志も述べられている 小説を書いた経験を活かす心づもりがうかがえる。また、「 自信は、 織田は『土曜夫人』の執筆経緯をしばしば青山宛の手紙で語って 織田にとって、 編輯長が来ての話では、受けているらしい。 昭和二十一年九月十 京日と大阪日日でついている」とある。 東京の新聞への進出は三度目の正直であっ Н 付の書簡には、「土曜夫人、改 これまでに新聞 (中略) 受ける 0) 昭 た。 和 ぼ

た、「鳩(五)」には「初夜の蚊帳を、木崎は八重子と二人で吊つが町』(「文藝」一九四二・一一)など多くの作品に出てくる。ま九三九・九)、『勧善懲悪』(「大阪文学」一九四二・八~九)、『わした』とあるが、沈没船引き揚げ事業の話は『俗臭』(「海風」一、銀造は既に破産してゐた。沈没船引揚事業につぎ込んで、失敗

用されている部分が少なくない。たとえば「貴族(五)」

そのためか、『土曜夫人』には過去の作品で使われた話が

再

利

帳』(「大阪新聞」一九四六・三・一)に酷似した場面がある。た。暗くして、螢を蚊帳の中に飛ばした」とあるが、これは『蚊

○・六)だけでなく、新潮文庫(一九四九・三)や角川文庫(一房、一九五○・五)や『現代長編小説全集』(春陽堂、一九五戻、一九四七・四)以降、『現代日本小説大系別冊1』(河出書絵田と戦後文学の代表作と見なされていた。それは初版本(鎌倉織田と戦後文学の代表作と見なされていた。それは初版本(鎌倉本)として書かれた『土曜夫人』は、少なくともある時期までは、こうして書かれた『土曜夫人』は、少なくともある時期までは、

夫人」であった」(「解説」角川文庫)と高く評価した。華やかに、一番完璧性をもって結晶し、流露したのがこの「土曜で、彼のいう人間の可能性を追及しようとしていた。それが一番難」いと述べ、富士正晴は「織田作之助は偶然と嘘をつく才能と

また、吉行は「解説」で「オダサクと「土曜夫人」は切り離し九五六・四)に収録され、版を重ねていた事実から明らかである。

の理由は、伴悦「『世相』・『土曜夫人』論」に「まさに『可能性『土曜夫人』にはまとまった論文の形での先行研究が少ない。そしかし、そのように重要性が指摘される作品でありながら、

でいるのかを論じることは可能である。本論では、『土曜夫人』の文学』の実践化にふさわしい長大なロマンの片鱗をおもわせる下絵ではあった。もちろん中絶の下絵であったにしても」とある下絵ではあった。もちろん中絶の下絵であったにしても」とあるい。論じにくいということだろう。

「かし未完の作品でも、残されている本文の中で、何がなされているのかを論じることだろう。

でなされた試みを、「読売新聞」を手がかりに考えたい。

二 『土曜夫人』の構造

ある。 で東京へ移動している。二つの都を軸に、 わずかながら大阪も出てくる。また終盤、 六年八月一○日から一一日にかけてということになる 銀造ら二〇人近い人物が入り乱れる、全一二章の群 隆・貴子・章三・露子・カラ子・夏子・銀ちゃん・芳子・北山 かけての一昼夜を、 能性があったと言えよう。 舞台は主に京都である。ただし大阪駅や中之島公園周辺など、 作中の時間は、 小説 後述する大阪刑務所集団脱走事件を指標とすれば、 の内容を確認する。 敗戦後、 陽子・茉莉 土曜の夜から日曜の夜までの一昼夜で 『土曜夫人』 ・木崎・ は、土曜日から日曜 京吉・ 複数の主要人物が汽車 物語はより複雑化する チマ子・ 像劇である。 坂野・春 一九四 日に

作品の梗概は次のように整理される。

室の坂野と話しヒロポンを打っている内に、チマ子はライカと共室の坂野と話しヒロポンを打っている内に、チマ子はライカと共務がれる。その前に陽子は京吉に話を聞く。陽子もダンサーだが、る。茉莉の友人の陽子は京吉に話を聞く。陽子もダンサーだが、為。茉莉の友人の陽子は京吉に話を聞く。陽子もダンサーだが、本屋町のキャバレエで、ダンサーの茉莉が京吉と土曜日の夜、木屋町のキャバレエで、ダンサーの茉莉が京吉と

1 0 HZ

に消える

(「夜光時計」一~六)。

知った陽子は部屋を飛び出すが、そこで章三と出くわし、素足のの相手をする。そこに陽子が春隆を訪ねてくる。春隆の思惑を料亭の主の貴子は愛人の春隆の、次いでパトロンの木文字章三

を頼まれる(「夜の花」一~八)。 入れられる。そこで貴子の娘のチマ子と知り合い、木崎への伝言素足の陽子は巡査に「ブラックガール」に間違われて留置場に

まま逃げる(「貴族」一~七)。

けたはなどの限益で行む間、店にませって、系をで進して見てらされるが、カラ子と東京に行くと決める(「兄ちやん」一~七)。のいて歩く。京吉は喫茶店でマダムの夏子に陽子からの電話を知京吉は靴磨きの少女カラ子に再会する。カラ子は京吉を慕って

貴子は露子の銀座で店を開く話に乗せられ、春隆を連れて東京 貴子は露子の銀座で店を開く話に乗竹侯爵邸の売却を知り、
に行こうとする。章三は新聞の広告で乗竹侯爵邸の売却を知り、
は告げずに自分も上京を決意する(「東京へ」一~四)。
貴子には告げずに自分も上京を決意する(「東京へ」一~四)。
貴子は露子の銀座で店を開く話に乗せられ、春隆を連れて東京

来いという(「登場人物」一~九)。

思い出して陽子に惹かれる(「鳩」一~七)。うとする。木崎は断るが、やはりダンサーだった亡妻の八重子を「陽子は木崎のアパートに行って自分を写したフィルムをもらお務質問されている内に逃がす(「身上相談」一~八)。

ラ子からだが、店では坂野の細君も銀ちゃんを待っていた。祇園雀をする。喫茶店から京吉に電話がある。スリを尾行しているカ京吉は東京行きの資金を稼ぐために祇園荘で銀ちゃんたちと麻

之島公園で問い詰める。そのとき大阪拘置所から脱走した囚人のかった夜の女の行方を捜しているが、カラ子の尾行に気づき、中子を止める。その間にカラ子とスリを見失う。スリの北山は親しいることに気づく。だがそこには坂野も来ているので、京吉は芳いることに気づく。だがそこには坂野も来ているので、京吉は芳いるに東語が来る。芳子は京吉と話して祇園荘に銀ちゃんが荘では京吉の代わりに坂野が来る(「キヤツキヤツ団」一~九)。

を目撃した美しい女は、自分に会いたければ銀座のアルセーヌへ出るが、そこで口論になった男を突き落としてしまう。その現場ている。章三は貴子と春隆の睦まじい様子を見て怒り、デッキに貴子は露子と春隆と東京へ発っていた。その汽車には章三も乗っ大阪駅で銀造は章三を見かけ、貴子を求めて田村へ行く。だが

たチマ子の父の銀造が拾う(「暮色」一~九)。

波に巻きこまれ、

北山は財布を捨てて逃げる。

その財布を脱走し

は銀造を見かける(「走馬燈」一~十一)。 隆と関係していなかったと知り、恥じて逃げる。俥に乗った京吉で、芳子を見かける。戻ってきた京吉は陽子に挑むが、陽子が春陽子の家を訪ねるが、芳子は逃げる。銀ちゃんは坂野と俥に乗っカラ子は京吉を探すが見つからない。京吉は芳子と連れ立って

男女が遭遇し、すれちがう様子が描かれる。同時進行で語られてゆくことである。年齢も社会的階層も異なるから日曜の夜という短い時間の間に、多くの登場人物の動向が、このような筋書きにおいて、第一に注目されるのは、土曜の夜

根を浮かび上がらせる効果をねらっているのだと考えられる。 場面転換を多くすることで、各人の個性よりも、彼らを含んだ世場面転換を多くすることで、各人の個性よりも、彼らを含んだ世場の場所に移動したりすると、一日ごとに読み進む読者は記憶に別の場所に移動したりすると、一日ごとに読み進む読者は記憶に別の場所に移動した物語として把握しにくくなる。『土曜夫人』の場合は、あえて中心が定まらないほど登場人物を増やし、人』の場合は、あえて中心が定まらないほど登場人物を増やし、人』の場合は、あえて中心が定まらないるのだと考えられる。 相を浮かび上がらせる効果をねらっているのだと考えられる。 相を浮かび上がらせる効果をねらっているのだと考えられる。

義になり、かえって読者の興を削ぐためだ。

大ためには、必然の支えが不可欠だろう。さもなければご都合主からしめているのだと言える。ただし偶然の出会いをリアルに描然といふものの可能性を追究」しようという「作者の試み」がしまた、人々が次々に遭遇する。それは、後でくわしく見る「偶また、人々が次々に遭遇する。

あらう」(「東京へ(一)」)と語られているとおりである。 なぎつてゐる自尊心が、元来自尊心の強い陽子を反撥したので 等三のやうな男のタイプには好感が持てなかつた。章三の全身に 物として造型されている。「好悪感情のはつきりしてゐる陽子は、 素でもある。この小説では、特に陽子や章三が、自尊心の強い人 素でもある。自尊心と嫉妬は、織田の多くの作品に見られる要 チーフである。自尊心と嫉妬というモ

を取る。

陽子は春隆に料亭に誘われ、

その自尊心が刺激されるゆえに、

れ、京吉は止めるが、「行くな一彼らは普段なら取らない行動

また、章三は「自尊心を傷つけられて、我慢するくらゐだつた一)」)、夜更けに料亭に行き、章三に再会するはめになる。一)」)、夜東けに料亭に行き、章三に再会するはめになる。と言はれると、陽子はもう天邪鬼な女だつた。理由はきかず、命

ち、「野心以上に自尊心の振幅によつて動く」ゆえに、愛人の貴ら、死んだ方がましだ」(「登場人物(七)」)という「信条」を持ら、死んだ方がましだ」(「登場人物(七)」)という「信条」を持

て余したまま、踵をかへすと、三等車との間のドアをあけて、デたままズキズキと膿み出してゐる自尊心のはけ口のない膿を、持子が春隆と親しげにふるまう様子を汽車の中で目撃し、「傷つい

の自尊心はそんな向ふ見ずを彼に許して置くほど、けちくさい自「汽車の中でいきなり貴子を撲らうとしたのだが、しかし、章三むろん自尊心が強いから行動しないこともある。同じ章では、ツキへ出た」ことで、殺人を犯し、乗竹妹に出会うことにもなる。

へ出るのであり、物語を動かす突発的な行動が、主要人物の強いも語られる。しかしそのために章三は感情をもてあましてデッキ尊心ではなかつたから、二三歩行きかけて、急に立ち停つた」と

自尊心から生まれているのは明白である。

端、再び燃え上つた」ことで、彼女に注目し始めたのである。存在した「嫉妬の火」が、「十番館へ来てはじめて陽子を見た途すなわち「一昨年八重子が死んでしまつても、消えてしまはず」た亡妻の八重子を重ねることで、陽子への見方が変わってゆく。写体として魅力的ではなかった。しかし結婚前に男性関係のあっ塚妬も同様である。カメラマンの木崎にとって当初、陽子は被嫉妬も同様である。カメラマンの木崎にとって当初、陽子は被

さらに、貴子の元パトロンで脱獄囚の銀造は、当初は娘のチマ気相手の銀ちゃんが見かけるという偶然につながってゆく。疾妬であらうか」(「走馬燈(七)」)。そしてその芳子の様子を浮嫉妬であらうか」(「走馬燈(七)」)。そしてその芳子の様子を浮嫉妬であらうか」(「走馬燈(七)」)。そしてその芳子の様子を浮すれてあらうか」(「走馬燈(七)」)。

てゐるか、予測の限りではない。

「この物語もはや八十五回に及んだが、しかし、時間的にはこの物語もはや八十五回に及んだが、しかし、時間的にはこの物語もはや八十五回に及んだが、しかし、時間的には

のしからしめるところであるが、同時にまた、偶然の網にひすることによつて、世相を泛び上らせようといふ作者の試みそして、このことは結局、偶然といふものの可能性を追究

しに彼等の周囲にひきとどめて、駈足で時間的に飛躍して行主人公たり得るのだと要求することが、作者の足をいや応な人として、いや日本人の一人として、われわれもまた物語のつ掛つたさまざまな人物が、それぞれ世相がうんだ人間の一

かうとする作者をさまたげるのだとも言へよう。

と同一平面上に置かれていることがある。いいかえれば、読者はらいいうねらいが明らかにされる。重要なことは、このように「作者」が作中に現れる仕掛けも、世相を浮き彫りにするために用いられているはずだということである。 世相を浮き彫りにするために用いられているはずだということである。 世相を浮き彫りにするために用いられているはずだということである。 世相を浮き彫りにするために用いられているはずだということである。

識的な新聞小説であるからでもある。

では、「世相」を小説に組みこみやすくしているのである。

いする〈世相〉を小説に組みこみやすくしているのである。

いるが、が、新聞の読まれ方に意味する〈世相〉を小説に組みこみやすくしているのである。

虚構を、虚構以外のものと同時に視野に入れて読むのだ。

新聞は誰でも読む。(中略)しかし、同じ新聞を同じ時に

三 『土曜夫人』と新聞

に、ひとびとが一番さきに見る欄は、それぞれ違つてゐるのの同じ欄を見るだらうし、また、われわれが思つてゐる以上のの同じ欄を見るだらうし、また、ひとびとは一番さきに新聞われわれが思つてゐる以上に、ひとびとは一番さきに新聞われわれが思つてゐる以上に、ひとびとは一番さきに新聞われわれが思つてゐる以上に、ひとびとは一番さきに新聞われわれが思つてゐるのが、同じ記事だとは限ひらいても、一番さきに眼にはいるのが、同じ記事だとは限

ときには、メタフィクション構造が重要な役割を果たす。然」への自覚がある。そして実際に虚実の境界が乗り越えられる説には、他の記事や広告と同じ平面で読まれることで起こる「偶新聞小説で、新聞の読まれ方の多様性が語られる。この新聞小

だ。(「身上相談 (一)」)

紙面の他の欄の利用。 の記事との境界を低くするねらいがある。メタフィクションと、 ~一九四四・四・六) たとえば高見順『東橋新誌』(「東京新聞」一九四三・一〇・三〇 試みていた。新聞小説におけるメタフィクションの先例としても 日本でも一〇年ほど前に、太宰治、 〈世相〉 語りの水準の侵犯が珍しいのではない。それは織田が「東京新 宛の手紙で挙げていたジイドの 紙面と重なる〈世相〉を作中に取りこむことで、 を描く目的において連繫しているのである 織田が新聞小説でくり返した二つの手法は が挙げられる。しかし織田の新聞小説の場 石川淳、高見順らが積極的に 『贋金つくり』だけでなく、 創作欄と他

二五~九・一六)、菊池寛『真珠夫人』(「東京日日新聞/大阪毎ある。それは小杉天外『魔風恋風』(「読売新聞」一九〇三・二・を試みている。たとえば、処女の貞操の危機で引きつけることが織田は『土曜夫人』において、新聞小説としてさまざまな技法

日新聞」一九二〇・六・九~一二・二二)などが想起されるよう

「四十女の色気」が具体的に述べられ、さらに「貴族(一)」などたのは、貴子の描写である。春隆や章三にしなだれかかる貴子のでも、「走馬燈(十)」に陽子が京吉に挑まれる場面がある。『それでも私は行く』で既に同じ技法を使っている。『土曜夫人』に、明治大正期以来の新聞小説の常套手段だと言える。織田も

貴子の姿は読者に強く印象づけられることになる。

の小磯良平の挿絵に半裸の貴子が描かれることで、男を誘惑する

ニヒリズムの文学であつて舟橋聖一や邦枝完二のエロ文学と混同学がエロ文学であるかどうかといふ点について、私個人としてはという読売新聞文化部長の原四郎の談話では、「織田作之助の文という読売新聞文化部長の原四郎の談話では、「織田作之助の文という読売新聞文化部長の原四郎の談話では、「織田作之助の文という読売新聞文化部長の原四郎の談話では、「織田作之助の文という読売新聞文化部長の原四郎の談話では、「新聞小説の卑―九四六年一〇月二四日付「日本新聞報」には、「新聞小説の卑― へれて、私個人としては、「新聞小説の卑猥化」が問題視されるまでになる。そのために「新聞小説の卑猥化」が問題視されるまでになる。

圧倒的な成功ではないまでも一面には新しい分野を開いてゐるとられない」といふ逆説的な抗議もあるが(中略)新聞小説として販売の方では非常に喜んでゐる」し、「こんな小説は家庭に入れしたくない」と擁護された。また「営業的には確かに成功であり、

自負する」と述べられている。

まず、

政治欄との関わりがある。

小説には、

陽子の父の鉱三が

人」は、いかん! 痴態と媚態以外に何もないじゃないか」といる「織田君を私は全面的に認めないのではない。しかし「土曜夫かった。それは高見順の一九四六年一一月二二日付の日記におけとはいえ、性的関心を煽ったことは、作家仲間からも評判が悪

か。前述のような貴子の描写を、語り手は滑稽化してもいる。しかし『土曜夫人』は「痴態と媚態」を中心にしているだろう

う言からもうかがえる。

な貴子の恰好を見て、噴き出したくなつてゐた。(「貴族たのだ。これは重大な手落ちだ。すくなくとも、春隆はそん女の服装が時に滑稽に見えるといふことに、気がつかなかつしかし、彼女はその服装では、一つだけ失敗してゐた。彼

かったのではないか。態と媚態」は、読者を引きつけるための技巧のひとつに過ぎな態と媚態」は、読者を引きつけるための技巧のひとつに過ぎなる。性的な興奮を煽る効果は薄められている。織田にとって「痴貴子は語り手に迂闊さを指摘され、誘惑相手に影で笑われてい

なされているように思われる。てきた。しかしこの小説では、極めて多様な角度から、積極的にてきた。しかしこの小説では、極めて多様な角度から、積極的にん現実の世界を報じる紙面との連動は、多くの新聞小説でなされむしろ織田が工夫を凝らしたのは、紙面との連動である。むろ

八・一一) したがって当時の読者は、作中人物の意見と、過去に社会党 全面的に反対 加藤勘十氏談」(「読売新聞」一九四六・員の反対論が記事になっていた(「金融措置令改正と各党の態度員の反対論が記事になっていた(「金融措置令改正と各党の態度をの一ヶ月ほど前の「読売新聞」では、加藤勘十という社会党議金融封鎖反対論を説いていることが語られる(「夜の花(三)」)。

広告欄との関わりもある。「東京へ(三)」において、章三実際あった紙面とを重ねることができたはずである。

一は新

【図参照】。同じ新聞の同じ面の近くに掲載されているため、『土その二段上に、「某侯爵邸分譲」の広告が載っているのである九月六日第二面には、『土曜夫人』第八回が掲載されているが、をとめる。これとよく似た広告が、実際に「読売新聞」にあった。聞を広げて、「売邸、某侯爵邸、東京近郊……」という広告に目

曜夫人』の読者の大半がこの広告を見ていたはずである。

家に制御できることは少ない。しかし、地方紙において広告欄とこれら広告欄と創作欄との関わりは、偶然の要素が大きい。作も新聞読者は作品世界をリアルに受け取りやすかったと言える。の売却など、他にも作品に登場する事物が載っていた。その点で連載中の「読売新聞」の広告欄には、ダンサーの募集やカメラ

き起こす仕掛けを大量に仕込んでいたと考えられる。創作欄との相互作用を活用していた織田は、そのような偶然を引

強調されるのだろうか。また、「キヤツキヤツ団(一)」で京吉は兄ちやん誘拐して!」という会話をする。なぜここで「誘拐」が吉とカラ子は「おれと一緒に歩くと、誘拐されるぞ!」「うん。また、織田が紙面との対応を直接的に意図した場合もある。そまた、織田が紙面との対応を直接的に意図した場合もある。そ

【図】「読売新聞」一九四六年九月六日第二面



やがるんだよ。 間抜けたポリ ひでえ眼に会ふ」と言う。この「 的 円山公園感じ悪いよ。うつかり女の子連れて歩く **巡** (査) もあつたもんだ。 樋 \Box とは お れ た極 誰 なの \Box だと思ひ か。

載当時 を薄くしているのである。 といった記事が『土曜夫人』と同じ面で報道され続けていた。 知の雑貨店に宿泊 月には、 るニュー 誘拐さる」(一九四六・九・一九)、「誘拐魔樋口 口」という名前だったのである。「住友本家の令嬢、 は、 現在の読者が予備知識なしに読むと浮かぶこれら 旧財閥の令嬢が誘拐される、 の新聞読者にはわかりきったことであった。 スを取り入れることで、 世を大いに騒がせた誘拐事件があり、 住友邦子さんは無事」(一九四六・ 紙面における虚構と現実との という敗戦後の混乱を象徴 その犯人が 捕 る 0 学校前)疑問 九四六 九・二 岐阜県付 は、 から 年九 四 樋 壁 連

には坂口安吾「肉体自 本の「実存主義」運動」(一九四六・一一・一八)である。 文化欄も、 例もある。 ゐるといふこと、この真実の発見によつて始めて新たな、 考する肉体自体といふことを狙つてゐるやうに思はれる」 これからの文学が、 逆に、 ラルがありうることを私は確信する」と述べた。また、 が掲載されている。 紙面の他の記事が創作欄に影響を及ぼしたと考えら 『土曜夫人』と同じ面に載った。注目されるのは、 連載当時の 思考する肉体自体 .体が思考する」と伊吹武彦 「サ 「読売新聞」では、 安吾は 「織田作之助君なども、 0) 言葉の発見にか 折に触れて掲載される ル 明確に思 として 1 伊 真実な つて れる 吹 ル Н

品―これを新円 づらしげに取り出されたほか、 生みはしなかつた、 に暗示しつつあるばかりである」と述べた。 かも日本ではこの暗さと苦悩が文学的に一体何を生んだか、 戦後のフランスの 一級といつては無礼になる―がなにも たかだか第二封鎖級の老大家の 暗さと苦悶は日本のそれと大差はな 僅かに織田作之助、 作品が Ō 坂口安吾の作 かをほ b 61 のめ 何も 0

か

方法や構造を楽しむ視座を与えたはずであ あることがうかがえるようになる。それは作品の内容だけでなく 説を連載している作家が かったであろう。 なるほど安吾と伊 文学者が共に、 理論武装にも見える。 同じ紙面で『土曜夫人』が連載されていた事実は見過ごせない。 これらは先にあげた「卑猥化」への批判に対する、 織田の名前を出した上で新しい文学を語っており しかし彼らの言説によって、読者は同じ面で小 吹の専門的な意見を咀嚼できた読者は多くな だが人気急上昇中の作家と三高のフランス 「肉体」を描くことに、 る 思想的な意味が 新 聞 社側 0

覚えかねない n 征中に、ある巡査に妻と関係を持たれ、 読 わりを見たい。「身上相談 白さがある。 去られてしまったという。 む。そこに復員してきた男性の相談が語られ このように『土曜夫人』には、 しかし、 これは初出で『土曜夫人』を読んだ読者が、 場面であっ 必ずしも良い話ばかりではない。 た。 (一)」で、 その記事を読 先に取りあげた、 初出紙面で読むことで際立 坂野は新聞の身上相談欄を 金を使われ、 んで坂野は憤慨する。 てい 章三が新聞で広告 る。 家庭欄との 子どもを連 違和感を 男 性 は出 5 関 面

あ あろう。

、と坂野は妻の芳子を銀ちゃんに寝取られていたことがわかると

内容は先に述べた嫉妬のモチーフともつながるし、

作中人物と、 を見る場 で見る視線とが重なることにあった。 面 の 面白さは、 読者の視線とが 作中人物が新聞を読む視線と、 「偶然」 致することにあ 偶然 に人生を賭け 読者が った。

L

読者の目 皆無ではないし、 聞」に「身上相談欄」 かし身上相談欄はない。 ところが、 の前にあった新聞とは異なる。 坂野が新聞を読む場面は逆である。 読者の声を拾う投書欄もないわけではない。 は存在しない。 したがって、 坂野の読む新聞と、 今で言う家庭欄的な記 作中人物と読者との 当時の 「読売新 同 時代 事は

を読む視線のずれが露わになってしまうのだ。

阪の よとい 手紙を用いることで、 まつたのでした」という相談を元にしていることは明白であろう。 査の言葉に偽はられて不倫の関係に陥り、 子供まで出来てしまつたのでした」と始まる相談が、「夕刊 逃去る」である。 掲載された「人生案内 と考えられる。 人』で「問 実は、 織田は、 ふ一巡査の言葉に偽はられて、 一問私の出 この「身上相談」は別の新聞の記事を参照して書かれ やはり敗戦後の混乱を象徴する、 一九四六年九月二三日付 私の出征中、 征中、 紙幅 作品世界に現実性をもたらそうとした 1の関係上長くは引用できないが、 妻は 出征中に巡査が妻を 妻は、 「前線から帰られない」といふ 御主人は前線から帰りません 不倫の 「夕刊新大阪」 遂に子供まで出来てし 実際に新聞に載った 関係に陥り、 復員恐れて嬰児と 『土曜夫 つひに 新大 丽

いう構成 ある新聞との齟齬は決定的である 0 妙 もある。 しかし、 坂野の読 む新聞と、 読者の目 \bar{o} 前

で「読売新聞」でも紙面と連動する効果を使った。ところが、 織田は地方新聞で、 紙面と連動させた小説で成功した。 その勢

織田は小説に地方新聞の記事をも取りこんでいる。その結果ずれ

売新聞」でも報じられている。 際にあった事件を元にしている。 大阪の拘置所からの集団脱走の流れに乗る場面がある。これも実 幕色 (九)」には、 チマ子の父で貴子の元旦那である銀造が、 一九四六年八月一三日付の 一読

も生まれているのだ。そして、

ずれはこの部分だけではない。

時 ため、ニュースバリューが小さかったということであろう。 常に小さい。二面の下の方に一段で九行である。 段抜きの大きさである。 明になる。 0 L ただ、その「百卅名を逮捕 かし、事件が起こった大阪ではパニックが起こっていた。 「朝日新聞」の東京版と大阪版を比較すると、 当時の「読売新聞」はもっぱら関東地方で読まれ 八月一二日付東京版の記事は、 同日の大阪版の記事は、 大阪の集団脱走」 第二面中央下段に、 という記事は 翌日以降に続報 東西の差異が 第二面最上段 ってい 当 た 非

七・二)には、 に生じたとも考えられる。 このような齟齬は、 題を決めるのに 織田が執筆しながら構想を練っ 「文学的饒舌」(「文学雑誌」 <u></u> 日 構想を考えるの たたため 九四

ってい

ば

「大阪日日新聞」 大阪の地方新聞は、

最上段右端という最も読者の目に付きやすい位置に記

準

備不充分なまま書き始められたのは

の一九四六年八月一二日の紙面では、 もちろん大々的に取りあげていた。 関連する報道が続く。

が、

東京版はこの一回で終わりであ

たとえ 面の

大阪版では翌日も翌々日

Ę

齬

右端に、三段抜きの大きさである。

たの 事 近畿圏の読者には、 交じる感覚は生まれない。また、そのような感覚を持てるはずの のため、 もはや織田を取り巻く状況は、 しかし、それらは関東圏の読者には馴染みのない が置かれている。 か、 大阪の脱獄事件が組み入れられても、 責任の所在はどこにあるかといった報道がなされた。 新聞が行き渡っていなかったのである そして翌日も翌々 地元の新聞で思いつくままに 日 Ę 脱走者が何 現実と虚構が入り 話である。 人捕ま そ 0

記事と広告と創作が言及し合う、 書いていた頃に支持された、土地の名前や店の名前を次々に作中 やっていた頃とは変わっていた。京都で『それでも私は行く』を に持ちこむ方法も、 広範囲で読まれている新聞では使いにくい 地方夕刊紙時代に見られたダイ

ナミズムは失われているのである。

現実の時間との不一致も見逃せない。

0) ú

厚な雰囲気を作ろうとしたのであろう。 田は現実の事件を取りこむ上で、複数の事件を圧縮することで濃 脱走する頃に、 八月である。 ば、 注意深い読者に抵抗を覚えさせた可能性があ 誘拐事件が起こったのは九月である。 京吉が「樋口」を語るのは、 しかしその方法が生 脱走事件が起こった 辻褄が合わない。 だから銀造が

たのまれてから書き出すまでに二日しか費さなかつた」とある。 167

『十五夜物語』『それでも

だが」途中からは、「決然として、この作品に全精力を打ちこむ 私は行く』などと同じである。 しだいに意気ごみが変わってくる。 しかし 「安易な態度ではじめたの

覚悟をきめた」とあるように、

遅れた。それだけ構想が変化したのである。 られている。わずか一ヶ月で、乗竹信子の登場場面が三○回分も で、 外な事件を起し、結局これが小説のヤマになるのと、八十回前後 の書簡では、「九十回目あたりで侯爵の妹が出て来て、 なるだろう」と語られている。ところが、同年 りで出て来る予定だが、これが章三と二人である意味の主人公に 見通しまだコントンとして全くつかない。春隆の妹が六十回あた 紙からもわかる。「昭和二十一年九月 日」付の書簡では、 小説が執筆過程で少なからず変化したことは、青山光二への手 貴子の前のパトロンが刑務所を脱走する事件が重要」 一一〇月 章三と意 だと語 日付 筋の

じ銀座であるから、 も東京に行こうとしており、 同級生に設定された陽子と乗竹信子も会うだろう。京吉とカラ子 た」とある。おそらく陽子と木崎は再会するのであろう。 つまり、この後さらに変わらざるを得なかったはずなのである。 だし「読売」からは年内での打ち切りを通告されていたという。 「葉子は階段を降りて行きながら何かしらもう一度このアパート 、やつて来ることがありさうな気持に、 この先の展開が予測不可能なわけではない。「鳩(七)」には 結局、 織田は倒れて『土曜夫人』を書き終えられなかった。 彼らにも重要な役割がありそうである。 カラ子の出身地と信子の勤め先が同 ふつとゆすぶられてゐ また、 銀座 た

> は章三が向かい、 冒頭で茉莉が死を選んだ理由は謎のまま残ってい 貴子が店を開こうとしている場所でもある。

伏線は多く残されている。

織田にプロットの

相〉を描く目的はある程度まで達成されているはずである。 よう。 なる偶然の「可能性」を期待させたまま残している小説だと言え あったはずである。 ただ新聞小説として決して短くはなく、敗戦直後の しかし、それも変更が予定されていた。 さら 世

曜夫人』は「徹頭徹尾偶然で組み立てられた、動きのやたらにお 新聞小説になるだろう」とも語っていた。また、荒正人は、 「最後まで新しい人物がつぎからつぎへ出て来るという型破りの 土

読者と途中参加の読者との差異が生じにくい。 れない。次々に別の人物が登場するために、 場面を愉しんでゐさへすればそれですむのである」と述べていた。 ほい小説である。 要するに、 一回一回をそのつど楽しめばそれでよい小説かもし 前後の脈絡など覚えてゐなくとも、その場 継続的に読んでいる

けて読めた読者は多くなく、 くかった時代である。 する小説だったのはないか。なにしろ新聞が物理的に手に入りに 『土曜夫人』が連載されていた時期、 序盤の布石を記憶し、最初から最後まで続 作家も期待しづらかったであろう。 新聞社は第二次読売新聞

争

議の渦中にあった。この事件が織田の視野に入っていたことは

どの回から読んでも楽しみやすいという意味でも「偶然」を許容 かもしれない。先に引用した九月某日付青山光二宛書簡では、 あるいは、たとえ完結していても、伏線は回収されなかったの 腹案もいくらかは 『土曜夫人』は、

単一ゼネストが東京での大問題であるかも知れないが、し 単一ゼネストが東京での大問題であるかも知れないが、し 単一ゼネストが東京での大問題であるかも知れないが、し 単一ゼネストが東京での大問題であるかも知れないが、し 単一ゼネストが東京での大問題であるかも知れないが、し

ろう。 二ヶ月も経たぬ内の出来事である。 いた『夫婦善哉』 **『土曜夫人』** 敗戦直後の記憶が街から消えていった一九七○年代以降になって、 夫人』には当時の 絡んでいた。だが織田はそうした世の動きには無関心であ イデオロギー的な対立が社会に強く反映していたことは事実であ 織田はあくまで形而下の現実を描こうとした。その結果 織田が言うように、 発表当時において既に懐古の対象となりつつあった光景を描 いわゆる二・一ゼネストは、『土曜夫人』連載終了から の特色もあるにちがいない。 が読まれなくなった主たる理由でもあるだろう。 は、 〈世相〉 イデオロギーに縛られない点に彼が描 今なお読まれ続けているのである。 が濃厚に反映されている。それはまた、 読売争議にもGHQの意向が しかし敗戦直後のこの時期 一二十曜 Ź 加いた

注

- (「国語国文」二〇一五・一二)を参照されたい。「織田作之助『夜光虫』論――「大阪日日新聞」を手がかりに」「新聞」を手がかりに」(「国語と国文学」二〇一二・一〇)と(1) 詳細は拙稿「織田作之助『それでも私は行く』論――「京都日
- 文泉堂出版、一九九五・三) 「解説「ウマいということ」」(『定本織田作之助全集 第七巻』

2

- 九九―一〇一頁 九九―一〇一頁 世界思想社、二〇〇八・一一、
- (4) 大阪都市遺産研究叢書 別集3 関西大学大阪都市遺産研究センター、二〇一三・三
- 以下、青山宛の書簡は特に断らない限り同全集に拠る。(5) 『定本織田作之助全集 第八巻』、文泉堂出版、一九九五・三
- 「大阪文学」一九六九・四

6

- (7) 『終戦日記』文春文庫、一九九二・一
- (8) 「解説」(『現代日本小説大系別冊1』河出書房、一九五〇・五)
- 特集・ぼくの青山光二』月の輪書林、二〇一四・一一) (9) 「織田作之助からの手紙」(高橋徹編『月の輪書林古書目録十七

文はJSPS科研費 JP26770078の助成を受けたものである。論――新興地方紙から「読売新聞」へ」を基にしている。また、本論会「新聞のなかの文学」における口頭発表「織田作之助『土曜夫人』「付記」本論文は、二〇一六年八月五日に大阪大学で開催した研究集

(さいとう・まさお 本学准教授)